

## 令和7年度第1回京都府農林水産技術センター評議委員会概要

1 日 時 令和7年9月1日（月） 14:00～16:30

2 場 所 京都府庁3号館 第7会議室

### 3 協議事項

#### （1）令和6年度終了課題の評価

研究成果について説明し質疑応答の上、委員から評価をいただいた。

##### ◆京都府産和牛肉の特質を引き出す育種・改良方法の確立

（成果の内容）

- ・府内食肉事業者が重視する「小ザシ」や「モモ抜け」を画像処理で数値化
- ・小ザシ及びモモ抜け指標の遺伝率を算出。これらが育種による改良が可能な形質であることを解明。

⇒評点 4.2／5 点

#### 【質疑・意見】

○碓高原牧場だけが受精卵作出を担うのか。民間への技術移転も含め、実際に農家にどう普及するかロードマップがないと、畜産センターの業務効率化を目的とした成果に見えてしまうため、具体的に示してほしい。

○報告ではゲノム育種価の話題に限定されていたが、ゲノム育種価を推定した手法はなにか。形質とリンクする染色体の領域の発見の有無も併せ教えてほしい。

○「京都らしい牛」の比較対象としてはどこを想定しているのか。また、数値評価目標の今後の見通しについても、具体的に示してもらいたい。

○買参人はセリの際に、この数値をどのように利用する想定か。買参人の評価と数値での評価は完全に一致する想定か。

##### ◆枝豆「京夏ずきん」新品種の収量安定化及び高精度な収穫適期予測モデルの確立

（成果の内容）

- ・収穫期間が長く食味の良い枝豆「京夏ずきん」新品種を育成
- ・積算温度と莢肥大の回帰式を作成し、収穫予測モデルを作成中

⇒評点 3.8／5 点

### 【質疑・意見】

- モデルにより予測するのが収穫日だとすると、高温や夜温の影響を非常に受けやすいのではないか。高温の影響も要因にするなどして、考慮しないといけないのではないか。
- 生産者がモデルにより適期予測するメリットはなにか。メリットをもう少し明らかにする必要があると考える。
- モデルの具体的なパラメーターはなにか。算出される時期の幅が大きいようなら別の要因を追加したほうがよいのではないか。
- 適期を起点として、そこから毎日確認する、というような利用方法でもよいと考える。ただ、幅が大きすぎると信用されないので注意が必要。

### （２）農林水産技術センター中長期研究計画（案）－研究方針－について

- ・京都府農林水産ビジョンの施策及び京都フードテック基本構想を実現するため、おおむね10年後を見据え、直面する社会的・技術的課題の解決に向けて、重点的に取り組む研究テーマを整理するとともに、大学や民間等との連携を図り、高レベルな研究開発を進める体制強化の方向性を示す計画を令和8年1月を目途に策定する。計画期間は令和8年度から令和17年度までの10年間。
- ・第1回の評議委員会では「研究方針」について、第2回では「研究の推進体制」について協議を行う予定。

### ＜中長期研究計画 3つの研究の方向性＞

- 1 気候変動やSDGsへの対応など京都府の農林水産業を支えるフィールド研究の強化
- 2 京都の農林水産業にマッチしたスマート技術の開発
- 3 新たな需要創造に向けた新品種の育成や生産技術の開発、商品加工研究の推進

### 【主な意見】

- 生産基盤である農地の持続性と、生業としての持続性を強化することが現在の最重点課題。土壌の健全性の持続や保全農業の部分が弱い。生産基盤の持続性に軸足を置く計画を立ててはどうか。
- 綾部移転の意義は、畜産業との連携により、保全農業や気候変動適応型の研究ができる条件が揃うこと。中山間地域をキーワードとして、畜産業としての放牧にとらわれず、放牧酪農や家畜による雑草管理、鳥獣の警戒手

- 法として、地域の中でどうすれば持続性が担保できるかという縦軸の視点で、研究課題を検討してはどうか。また、農業大学校が併設しているので、学生に成果が普及できるという恵まれた環境が作れることもあげられる。
- 自然科学系の人との共同研究による技術開発ばかりではなく、社会科学系の人などと組むことにより、成果を普及・社会実装し、地域活性を図ることも大切である。研究に入る基盤作りで汗をかいてはどうか。
  - 現状値は書かれているが、将来の予測値を追加して、そのためには何を重点的に研究すればよいかといった観点で、記載してはどうか。スマート技術の開発について、農林水産技術センターには ICT 技術者がいないため、どこの企業や大学と組んで研究をするか想定が必要。
  - 研究方向が京都府の伝統野菜の改良ばかりになっているが、今の気候で栽培するのは困難。新しい作物の導入や、施設の大規模化など新たな観点に切替えることも必要。
  - 5～10 年で確実に起こるのが水温の上昇で、それにより魚種が動く。これをどう捉えるか注目したい。アカモクが出ているので、ブルーカーボンは研究されるのかなと思う。他の県でも読み取れる内容なので、京都らしさを出していただきたい。
  - 暑熱対策などの気候変動適応やスマート技術、需要創造によりブランド力を高めることも大事であり、この3本の方向性でいいと思う。各地域に特色があるので、地域に根差したブランドをアピールして、観光客を呼び込めるシステムができればよいと感じた。
  - 他の分野は京都府らしさが見られたが、森林はオーソドックスかつ、農技 C が取り組むには大きな課題のように思う。また、林業の担い手が少ないのは、林業の現状や儲かるという情報が伝わっていないことが理由と思う。林業の差別化、京都のブランド化など「儲かる」という視点での研究を取り入れてもらいたい。

### (3) 令和8年度 新規課題の重点化方針について

- ・社会情勢や多様なニーズから優先的に解決すべき課題を的確に抽出し、研究の重点化を図るため、これまで農林水産技術センターがニーズを整理し、抽出・計画化した新規研究課題を評議委員会が評価していたものを、今後は、研究計画作成の前から評議委員の幅広い意見を取り入れるプロセスに見直す。
- ・現場からの要望に基づく「新規課題重点化方針案」に対し、評議委員から意見を聴取し、重点化方針を定め、その方針に基づき具体的な研究内容を提案することとする。

### 【主な意見】

- 以前から取り組んでいる研究が、化粧を変えてまた出てきた印象を受ける。中長期研究計画案の議論を踏まえて、再度一から考え直した方が良いのではないか。課題候補については、精査が必要なものが多く、今回挙がっているような雑な段階で議論をすべきではない。
- 中山間地で儲かる農業をするために、どのように営農すれば良いかを実証できるような研究が必要。水産業、林業と比べて、農業は若手の参入が最も少ない。省力化する、価値の高い品目を作るなどに加えて、若い生産者に向けて、スマート技術をどう使うのか、どのような品目を作るのかなどを踏まえた提案が出来るような研究も必要だと考える。
- 中長期研究計画案の議論で出た、「儲かる」という以外に、「仕事に対して誇りを持てるような働き方をする」という視点も必要。もちろん担い手を確保するためには儲かる必要はあるが、例えば京都ならではのブランドを全面に出すことが出来れば、京都に住んで良かった、という思いになる事も出来る。
- 「儲かる」という視点について、生業としての持続性を確保するためには、収益性が必要。ただし、売れるものを作るだけが収益性の向上ではない。海外の論文では、保全型農業により、肥料および農薬の使用量、労働量が減ったことで結果的に収益性が上がった、という事例もある。儲かる手法でなくとも持続性の担保は可能なので、こういった発想で良いと考える。

## 4 報告事項

- (1) 令和7年度 F F 研究課題
- (2) 令和7年度タスクチーム活動
- (3) 競争的資金への応募状況